

紫斑病の防除を適期に2回行いましょう！

開花時期を確認しながら計画的な作業を

1 ほ場確認（審査）の対応

県によるほ場確認（審査）は次の2回行われます。事前に掲示板の表示確認、異形株や雑草を除去し、基準を満たすよう管理を徹底すること。

また、審査時には必ず立ち合い、審査員に同行しながら指示等を受けること。

ほ場確認の時期

第1期	開花期
第2期	成熟期

（1）採種ほ表示板の確認

表示板に記載した品種記号、地番、面積等間違いがないか再確認すること。

（2）自主確認の徹底

事前に複数人による自主確認を行い、問題が無いよう管理を徹底すること。

ほ場確認の基準（最高限度） <秋田県主要農作物種子検査要領別記2から抜粋>

変種、異品種及び異種類の農作物	雑 草	種子伝染性の病害及び虫害	その他の病害及び虫害並びに気象被害	農作物の生育状況
含まないこと	小発生であること	含まないこと	20%	特に異常な生育を示していないこと

ほ場確認の方法

<秋田県主要農作物種子検査要領別記2から抜粋>

項 目	確 認 方 法
変種、異品種及び異種類の農作物	全株確認による。ただし、あらかじめその精度について十分立証された方法による抽出審査に代えることができるものとする。
雑 草	ほ場1単位ごとにその外側を回りながら、又は適宜ほ場に入って周囲を注意深く見渡すことにより、農作物の外観を確認する。
種子伝染性の病害及び虫害	
その他の病害及び虫害並びに気象被害	
農作物の生育状況	

2 水管理

大豆は、開花～子実肥大期にかけて水分を多く必要とし、乾燥が続くと減収することがあるため、暗渠栓を閉めて土壌中の水分を保持させる。ただし、まとまった降雨がある場合は、暗きょ栓を開いて排水を図る。

（1）少雨対策

花芽分化期（開花期の7日程度前）から開花後42日までの期間は、高温少雨の場合は収量へ大きく影響を及ぼすので、1か月気象予報を参考に暗渠操作等で地下水位の調整を行ってください。

畝間かん水の目安

- 晴天が続き土が白く乾燥している場合や日中に大豆の葉が立ち、半分以上の葉で裏面が見える等を目安に実施する。
- かん水は、気温・地温が低下する朝夕の時間帯に行う。

（2）降雨後の停滞水の速やかな排水

7月～8月は大雨になることがあります。ほ場での停滞水があると排水不良により、黒根腐病や茎疫病が発生するリスクがあるため、速やかに排水する。

3 開花期追肥

水田転換初年目畑や地力の高いほ場では必要ないが、長期にわたり大豆の連作を行っているほ場（土壌や根粒からの窒素供給力の低下が著しいほ場）や湿害により生育不良となったほ場では、窒素追肥効果が認められている。

追肥時期と施肥量

- 開花期～開花後10日頃に行う。
- 肥料は、硫安または尿素とし、窒素成分で10a当たり5～10kgを施用する。

4 病虫害防除 裏面参照

今年は生育が進んでおり、**開花期が平年より早まっていると考えられるので、作業準備を早めに行うとともに、ほ場内を注意深く観察し、防除適期を見極めて確実に防除を行う。**

<参考> 品種の開花期の平年値 表-1

播 種 日	リュウホウ	あきたみどり
5月25日	7月23日	7月26日
6月 3日	7月26日	—
6月20日	8月 3日	—

※ 秋田農試の奨励品種決定調査における平年値

○ 紫斑病

開花時期に応じて確実に2回行う。

○ カメムシ類・マメシクイガ

近年、カメムシ類による子実被害が増加傾向にあるため、ほ場を観察し、発生状況に応じて適期に行う。

5 気象情報

気象庁の1か月予報（7/19～8/18）によると

- 暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高い見込み。
特に、期間の前半は気温がかなり高くなる見込み。
- 降水量は平年並み、日照時間は多い見込みとなっている。

6 病虫害の発生予察情報

○ 秋田県病虫害防除所が6月24日発表した7月の主な病害発生予報は次のとおり。




















病 害 虫 名	発生時期	発 生 量
ウコンノメイガ	平 年 並	平年並（前年よりやや多い）
食葉性鱗翅目幼虫	—	やや多い（前年より多い）



大豆採種ほ病虫害防除体系（令和7年度版）

開花期を見極めて防除パターンを変えましょう。

（薬剤量は10アール当たり）

判断条件		防除体系	対象病虫害	7月		8月		9月	
				下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	
開花が	7月21日より早い場合	地上防除	紫斑病（2回）	 開花期から20日後ころ 次のいずれか プランダム乳剤25（3,000倍液 150～300ℓ） フセキフロアブル（4,000倍液 150～300）			8月下旬 次のいずれか ジマンダイセン水和剤（400倍液150～300ℓ） ペンコゼフ水和剤（400倍液 150～300ℓ） 		
			カメムシ類 マメシンクイガ（2回）				8月下旬 パーマチオン水和剤（2,000～3,000倍液150～300ℓ） ※ ペンコゼフ剤と混用不可 9月上旬 パーマチオン水和剤（2,000～3,000倍液150～300ℓ）		
		無人航空機防除	紫斑病（2回）	 開花期から20日後ころ 次のいずれか プランダム乳剤25（16～24倍液 0.8ℓ） フセキフロアブル（24～32倍液 0.8ℓ）			8月下旬 ニマイバー水和剤（8～16倍液 0.8ℓ） ※トレボン剤と混用不可 		
			カメムシ類 マメシンクイガ（2回）				8月下旬 次のいずれか スミチオン乳剤（8倍液 0.8ℓ） トレボンエアー（8倍液 0.8ℓ） トレボンスカイMC（8倍液 0.8ℓ） 9月上旬（マメシンクイガ用） プレバソフフロアブル5（16倍液 0.8ℓ） 		
	7月21日以降の遅い場合	地上防除	紫斑病（2回）				8月下旬 次のいずれか プランダム乳剤25（3,000倍液 150～300ℓ） フセキフロアブル（4,000倍液 150～300） 9月上旬 次のいずれか ジマンダイセン水和剤（400倍液150～300ℓ） ペンコゼフ水和剤（400倍液 150～300ℓ） 		
			カメムシ類 マメシンクイガ（2回）				8月下旬 パーマチオン水和剤（2,000～3,000倍液 150～300ℓ） 9月上旬 パーマチオン水和剤（2,000～3,000倍液150～300ℓ） ペンコゼフ剤と混用不可		
		無人航空機防除	紫斑病（2回）				8月下旬 次のいずれか プランダム乳剤25（16～24倍液 0.8ℓ） フセキフロアブル（24～32倍液 0.8ℓ） 9月上旬 ニマイバー水和剤（8～16倍液 0.8ℓ） 		
			カメムシ類 マメシンクイガ（2回）				8月下旬 次のいずれか スミチオン乳剤（8倍液 0.8ℓ） トレボンエアー（8倍液 0.8ℓ） トレボンスカイMC（8倍液 0.8ℓ） 9月上旬（マメシンクイガ用） プレバソフフロアブル5（16倍液 0.8ℓ） 		
	ウコンノメイガ （多くの株で巻葉がみられ始めたら）			7月下旬～8月上旬ころ プレバソフフロアブル5（4,000倍液 150～300ℓ） 					
	アブラムシ類 （発生が多くみられたら）			7月下旬～8月中旬ころ に1回まで アディオン乳剤（3,000倍液 150ℓ） 